

[公演ノート]

指揮者生活 15 周年記念演奏会

15th Anniversary Concert as a Conductor

小口浩司

OGUCHI Koji

〈抄 録〉

東京のサントリーホール ブルーローズにて開催した「小口浩司指揮者生活 15 周年記念演奏会～讃美の夕べ～」の報告である。これは、筆者とイギリスの作曲家ジョン・ラッターの合唱作品を集める公演で、本稿はその目的、概要、演目に関する内容をまとめた。ジョン・ラッターの作品に関しては、作風を明らかにするための楽曲分析も加えた。

キーワード：指揮者、作曲、演奏会、合唱、聖歌隊、ジョン・ラッター（ジョン・ラター）

Abstract

This paper is a report of “Koji Oguchi 15th Anniversary Concert as a Conductor” at Suntory-Hall in Tokyo. This concert featured chorus music composed by the writer of this report and the British composer John Rutter. The contents involve the intention of the concert, an outline of the project, and a description of the program including an analysis of John Rutter’s works to clarify the style of his music.

Keywords: Conductor, Composition, Concert, Chorus, Choir, John Rutter

1. はじめに

本稿は、2019年9月14日（土）サントリーホール ブルーローズにて行った「小口浩司指揮者生活 15 周年記念演奏会～讃美の夕べ～」について報告する。演奏会の内容は、筆者とイギリスの作曲家ジョン・ラッター John Rutter (1945-) の合唱作品を集めるもので、出演はピアニストの碓井俊樹、合唱はこの演奏会のために特別結成された男声聖歌隊のアニバーサリー・クワイヤー 2019であった。演奏会の目的と概要、曲目に関して述べていく。

2. 演奏会の目的と概要

2.1 目的

①指揮リサイタル

指揮者としての研究発表である。今回取り上げた基督教の合唱音楽は、ヨーロッパの文化に根ざしたもので、石造りの教会のような空間を無理なく響かせる発声法、宗教学・聖書学を踏まえた解釈と表現法が必要になる。筆者は以前からこの分野に関心を持って取り組んでいるが、今回も過去の実践に基づき、合唱グループを約半年間指導して本番に備えた。その集大成としての演奏を披露することが第1の目的となる。

②作品発表

作曲家としての自作自演である。筆者は、これまでに少人数のコラスグループや聖歌隊のために、シンプルかつ歌いやすい旋律を重視した作品を書いてきた。その理由は後述するが、取り上げたア・カペラ用の作品は筆者が2010年から2018年に作曲したものであり、その時々の筆者を取り巻く社会の動きが、曲中には色濃く反映されている。つまり、第2の目的は、音楽を通して社会にメッセージ投げかけることである。

③社会貢献

自作品以外の演目として、今回はイギリスの作曲家ジョン・ラッターの合唱作品にスポットを当てた。バックグラウンドは、歴史と伝統を重んじる英国の教会文化である。国際理解としてこれらを紹介することも、演奏会を開く意義の一つと筆者は認識している。第3の目的は社会貢献である。

また、演奏会の宣伝も始まった本年（2019年）4月、筆者にとっても社会にとっても衝撃的なニュースが全世界を駆け巡った。フランス、パリの世界遺産ノートルダム大聖堂の火災焼失である。今回は、筆者の作品の中にノートルダム大聖堂に着想を得た作品が含まれていたため、何かできないかを模索した結果、コンサートに「大聖堂の復興支援」という目的を急遽追加した。この意思には多くの方々の賛同が得られ、寄付を募ることも叶った。義援金は、コンサートの収益の一部と合わせ、フランス大使館を通して現地へ送金した。

2.2 概要

演奏会の告知フライヤー（図1）と、その概要をまとめた（表1）によって示す。

3. 演奏会の構成

3.1 選曲のコンセプトと曲目

筆者は、当日配布のプログラムの挨拶に次のように書いた。一部を引用する。

令和の時代が始まって3か月、依然として心を痛めるニュースは後を絶ちませんが、音楽だけは希望に満ち溢れるものにしたいと活動を続けて15年が経ちました。その挑戦は、今後も変わることはありません。（中略）基督教の音楽は、クリスチャンであるか否かを超えて、我々がどこか魅了され、帰るべき心の音楽のひとつのように思います。そこには癒しと祈りが共存しています。このような人類の財産を演奏することを、私は平和に寄与する社会貢献であると信じます。まだまだ日本では認知の低い分野ではありますが、だからこそ多くの方々にその魅力を感じていただきたいと思っています。（後略）¹⁾



(図1)

前章で演奏会の目的を述べた際も、その一つが社会貢献であると記したが、音楽は演奏家や一部のファン層たちの自己満足であっては意味がない。故に、キリスト教の合唱音楽に触れたことがない人への配慮は絶対必要であった。作品の本質を伝えるために、訳詞ではなく原語（外国語）による演奏をすることは譲らなかったが、その分メロディが美しく耳なじみの良い小品を多数セレクトする方法を取った。また、ピアニストの碓井俊樹には合唱との共演以外にソロ演奏を依頼し、「ピアノによる黙想」と題した時間を設けてプログラムに変化を持たせた。当日の全演奏曲目を図2に提示する。

(表1)

演奏会名称	小口浩司指揮者生活15周年記念演奏会 〜讃美の夕べ〜
日時	2019年9月14日（土） 18：00開演
場所	サントリーホール ブルーローズ
指揮	小口浩司
ピアノ	碓井俊樹
合唱	アニバーサリー・クワイヤー 2019



(図2)

3.2 小口浩司作品について

筆者が作品を書くようになった契機は、ヨーロッパの男声聖歌隊のスタイルを維持して日本で演奏する場合、歌手の声域やパートのバランスに合った作品が極めて少ないことだった。また、高度なテクニックを要する作品が多く、芸術的に優れていたとしても、自分が携わるグループで歌うにはいささか困難が伴った。演奏者に適した作品の提供を目的として始めたのが、作曲活動のスタートであったと言える。

作曲に際しては、常に西洋の音楽文化に立脚したものでありたいと考えている。音楽の特徴は、テキストのリズムとアクセントを活かした作曲法であろうか。言葉と旋律の一致は筆者の最たるこだわりであり、それは「伝える」ということに重きを置いているからに他ならない。筆者は、自作品の作曲について、演奏会内で聴衆に向けて次のように話した。

私が作曲の際に意識していることは、主観ではありますが、「美しい」と思えるメロディを、曲全体に散りばめることです。(中略)そして、やはり美しいメロディは、多くの人々に感動をもたらします。音楽が人と人とを繋ぎ、社会に力を与え、「平和の実現に貢献できる作品を一曲でも多く生み出したい」。指揮者でありながらも、私が作曲をする理由はこの点に尽きると思います。(後略)

やはり、作曲においても社会貢献という点を意識せずにはいられない。筆者は作品タイトルに必ず年号(西暦)を記すようにしているが、これも、社会のために今何ができるかを考えているからである。

演奏順に、簡単な解説を添えて曲目を書き出す。

- ・アレルヤ (2010)
2つのグループの掛け合いが印象的な、復活祭(イースター)のための小品
- ・アヴェ・マリア 2011
東日本大震災の復興祈願を込めて作曲
- ・アヴェ・マリア 2013
グレゴリオ聖歌の「アヴェ・マリア(交唱/第1旋法)」に続いて演奏する、広島に向けた平和の祈り
- ・ミサ曲「ミゼリゴルディア」(2016)
「いつくしみ」をテーマに作曲した、小ミサ曲
- ・アヴェ・マリア 2017
ポルトガルの「ファティマの聖母」に着想を得た作品
- ・「日本の信徒発見の聖母」に捧げるミサ曲 (2015)
長崎の世界遺産・大浦天主堂で初演した、日本語による祝祭ミサ曲
- ・ミサ曲「ノートルダム」(2018)
フランス、パリのノートルダム大聖堂に捧げる小ミサ曲



(写真1) 自作品を指揮する筆者

3.3 ジョン・ラッター作品について

ここでは、演奏会で取り上げた作品を紹介するに留め、次章で作品の内面を見ていくようにする。以下に列記する作品はいずれも演奏時間が5分以内の小品である。楽譜は様々な編成（混声4部、混声3部、女声等）がオックスフォード大学出版局²⁾から出版されており、演奏場面を選ばずにフレキシブルに使用できる配慮が成されている。今日では、日本にいながらでも通販等を利用して入手することが容易になった。邦訳によって歌うことができる版も、パナムジカ³⁾から購入できる。

- ・素晴らしきものすべてを “All things bright and beautiful”
- ・神は私の頭の中に “God be in my head”
- ・思いもて歌う “I will sing with the spirit”
- ・主はあなたを恵みて守り “The Lord bless you and keep you”
- ・世界はたからもの “Look at the world”
- ・永遠の花 “A flower remembered”
- ・音楽はいつもそこに、あなたと共に “The Music’s always there with you”
- ・このうるわしき大地に “For the beauty of the earth”

4. ジョン・ラッター作品の分析

4.1 作風

演奏会当日に配布したプログラムの曲目解説は、音楽学者の伊東辰彦にお願いした。依頼に際して筆者は、「宗教音楽ではあるがその面だけを出すのではなく、ラッターの作品を知っている人も知らない人も新しい切り口で作品の魅力に迫れるような解説を」という要望を出した。音楽の本質にフォーカスしたいという思いからである。ラッターの作風を伊東は次のように述べている（以下引用）。

西洋音楽の伝統的な手法を用いたもので、どのパートも無理のない旋律の作り方がされており、

歌うことの純粋な楽しさ、互いに声を合わせることの喜びにあふれている。ラター〔ママ〕の音楽は、今日の世界に生きる私たち人間の作り出す多くの醜い現実（紛争、それに伴う殺戮、差別、貧困など）との際立った対比をなしており、人間が本来持ちうる美しさを象徴しているとも言える。ラターの作品を歌うとき、人間としての幸せを深く感じる人は多いだろう。そして、その歌声を聴く人も、同じように幸せを感じ、この世界に共に生きていることの祝福を感じずにはいられないのである。ラターが、その作品を通して、世界の平和と人類の幸福を強く願っていることが、多くの人々の心に切実に伝わってくるのではなかろうか。（中略）いわゆるポピュラー音楽的な感性が活かされていて、誰の耳にも大変親しみやすいように工夫されており、無理なく歌詞が聴き取れるのも重要な特徴であろう。こうした特徴は、おそらくラターが意図的に行なっていることであり、前述したように、「歌うことの純粋な楽しさ」、「互いに声を合わせることの喜び」、そして、「この世界に共に生きていることの祝福」を、素朴で簡素なやり方で表現するために必要な手段なのではなかろうか⁴⁾。（後略）

4.2 楽曲分析

前節で引用したジョン・ラッターの作風についての解説で、伊東は「誰の耳にも大変親しみやすい」「無理なく歌詞が聴き取れる」という作品の特徴や、「素朴で簡素なやり方」という作曲法を示していた。それでは実際の楽曲の分析を通して、伊東の言わんとする内容を確認してみたい。曲名表記は、原語の欧文表記を用いる。

4.2.1 有節歌曲のスタイルで作曲

“Look at the world” “For the beauty of the earth”は、4節で作曲されており、最後に簡単なCodaを伴った有節歌曲のスタイルである。一つのメロディを反復することは、人の耳に旋律を印象付ける効果がある。しかし、ラッターはただ繰り返しをするのではなく、転調を巧みに利用して音楽に変化を付けている。第3節で違う世界に誘う転調を行い、再び第4節の転調で音楽を頂点に導くという、漢詩の起承転結さながらの構築美である。調性は以下の通り。

“Look at the world” C Major → C Major → B Major → D Major

“For the beauty of the earth” B ♭ Major → B ♭ Major → G Major → B Major

4.2.2 音階で作曲

譜例1は“All things bright and beautiful”、譜例2は“For the beauty of the earth”の歌い出しである。長音階上行形をそのまま使用した旋律となっていることがわかる。譜例3は“For the beauty of the earth”の最終節に出てくるクライマックスの部分だが、ここでもやはり主旋律の音階は顕然である。この音階を利用した作曲は、提示した譜例以外の楽曲にも多数見受けられ、ラッターの書法の一つと推察する。

（譜例1）“All things bright and beautiful” 歌い出し



(譜例2) “For the beauty of the earth” 歌い出し

9 *mp legato*
For the beau - ty of the earth, _____

(譜例3) “For the beauty of the earth” クライマックス

76 *f*
Lord of all, to thee we ³ raise _____

4.2.3 テーマの反復で作曲

譜例4は “The Lord bless you and keep you” の歌い出し、譜例5は同曲のフィナーレである。音形は長音階下行形で、先述した音階で作曲する書法を取っているのであるが、譜例4（第3～4小節）に出てくる「A→G→F」を利用したモチーフが、譜例5（第35小節）から再び利用されていることに注目したい。歌詞を変え、音量を増し加えながら3回のステップを踏んで最高音に達する。高揚感を生み出すと共に、曲全体に統一感を与えている。

(譜例4) “The Lord bless you and keep you” 歌い出し

2 *p dolce e legato*
The Lord bless you and keep you: _____ The

(譜例5) “The Lord bless you and keep you” フィナーレ

35 *mp* *mf* *f* *mf*
A - - - men, a - - - men, a - - - men, a - - -

4.2.4 分析

以上3点に絞って作品を見てきたが、これらを総合して言えるのは、メロディがとにかく聴きやすいという点に尽きる。音階をベースにしてつくられた旋律こそ、伊東が提示した「素朴で簡素なやり方」の原型であり、この飾らない書法が「誰の耳にも大変親しみやすい」「無理なく歌詞が聴き取れる」という作風を生み出したと考える。

4.3 考察

「ラターの作品を歌うとき、人間としての幸せを深く感じる人は多いだろう」と、伊東は演奏する

者の視点でも述べていた。筆者もそう考える一人である。伊東の言葉を引用しながらラッターの作品を演奏者目線で見ると、次のように言えるのではないだろうか。旋律が簡素であるから、直ぐに覚えることができる「楽しさ」を持ち合わせている。巧みな作曲法によって、感動と興奮の「喜び」と「祝福」に満たされる。筆者の実体験によれば、それは一種のトランスとも言える陶酔状態に似ている。このような音楽の力を最大限までに活かした合唱曲は、人類の遺産と一つと言っても過言ではないだろう。聴き手にも歌い手にも魅力的なラッターの楽曲は、キリスト教界や合唱界では周知の作品であるようだが、そのような小さな世界に留めておくのは勿体ない。むしろ意味がない。何故なら、作曲家は万人受けする作品を書いているのだから。

5. まとめ

何度も書いてきたが、筆者の研究に基づく演奏活動には常に社会貢献が含まれている。音楽がどのように活かされているかということが最大の関心事であり、今回の演奏会も特定の分野に偏らない視点に立脚して開催したことで、広く多くの方々に足を運んでいただくことが叶った。寄せられた演奏会の感想の一部を引用したい。

- ・小口さんのつくられるミサ曲の旋律はとても明るく、美しく、指導される男声合唱ハーモニーは半音のずれもないほどの完成度。(政治評論家)
- ・フレーズ一つ一つが丁寧に心に届く音楽づくり。自然に音楽が流れて、そっと優しく包み込むような空気感が素晴らしい。(ピアニスト)
- ・ベーゼンドルファーのピアノが、暖かくよく鳴ってて。序盤、歌とのバランスが取れなかったが、みるみる歌が響いてきた。崇高な祈り。後半は涙を禁じえなかった。(一般)
- ・ジョン・ラターの数々の名曲、ピアノパートも美しい。一曲、一曲、考え抜かれたプログラムは流石小口さん。(ピアニスト)
- ・久しぶりに心の底の付箋〔ママ〕に触れる様な美しく感動的な合唱曲で(中略)何とか嫌なニュースが多く、世の中が平和な様でも荒れている今日この頃にあって、一服の清涼剤を頂いた様な素晴らしい至福の一夜。(大使館関係)
- ・会場全体の空気が愛情に包まれていたように思います。(一般)
- ・小口先生が書かれたミサ曲は品格と重厚さを保ちながらも斬新さを感じられるもので感服致しました。(キリスト教会関係)

このような各方面の感想を見ると、ひとまず今回の演奏会は多くの聴衆の方々に一定の安らぎの時間を提供できたのではないかと安堵する。これからも人と社会に豊かな音楽文化を提供できるように努めていく。特に、音楽が必要とされる場所に積極的に赴き、音楽の種を蒔いていきたい。社会のニーズにあった活動こそ、音楽による社会貢献である。

注

- 1) 配布プログラム p. 1に記載。
- 2) オックスフォード大学出版局：原語名はOxford University Press。オックスフォード大学の一部局として世界規模の出版活動を行っている。

- 3) パナムジカ：日本の京都に本社を置く、合唱楽譜を専門に取り扱う専門店。
- 4) 配布プログラム pp. 3-4に記載。

参考文献

- John Rutter *For the beauty of the earth* Oxford University Press 1980
同 *All things bright and beautiful* Oxford University Press 1983
同 *The Lord bless you and keep you* Oxford University Press 1992
同 *Look at the world* Oxford University Press 1996
同『このうるわしき大地に』パナムジカ2014年
同『素晴らしきものすべてを』パナムジカ2014年
同『主はあなたを恵みて守り』パナムジカ2014年
同『ルック・アット・ザ・ワールド～世界はたからもの～』パナムジカ2014年